

小紋潤歌集『蜜の大地』

斎藤佐知子

春潮の満ちくるまでの

歌集『蜜の大地』は小紋潤の、長く待たれていた第一歌集である。一九七一年から二〇〇七年までの作品から四百二十首を選んだ、と谷岡亜紀の覚書にある。小紋潤は現在入院闘病中であり、谷岡をはじめ馬場昭徳ほか長崎歌会の友人達の協力を得て刊行されたとも記している。

歌集の構成は編年体を採用しておらず、みずみずしい青春期の抒情的な作品から、成熟期の、人生の深まりを感じさせる作品まで、一人の歌人の一生を辿る言ってみればロマンチックな内容の一冊となっている。

- ・ 西海の旅籠屋に聴く春潮の満ちくるまでの力を思ふ
- ・ ころろ貧しく一夜の雨を見ておれば一連なりの雨きらきらし
- ・ 帰るさのバスの窓より見えて来るれんげ野に来よ四月のつばめ

西海、とは「長崎県、西彼杵半島の北部に位置する市」であろうか。故郷に近く、春の自然界の力を希望としてとらえている若々しい一首である。

違はずに來にける春に萼摘むいにしへの人のいにしへの幸

・ 雲雀あがり春はみどりの飲びにいもうとはまだ野に遊びをり

・ われに用なきものと思ひし人生の一齣に咲く冬のつばぶき

・ 一日は一日として過ごせよと風涉りきて芙蓉をゆらす

小紋潤は植物、特に草花に造詣が深く、南多摩の団地の住宅にはおびただしい植木鉢が並び、そのほとんどが稀少な山野草であったことを、その昔見聞したことを覚えている。

- ・ 一首目と二首目は、万葉集の山部赤人、大伴家持の歌が背景にあるだろう。古代人と共に葦への愛着を飲びあっているのである。芙蓉もつわぶきも心象風景を構成するさりげないが重要な働きを果たしている。
- ・ 傘いだき出で立つあした日常はこぼみか

たきまで眼前にあり

・ 「小紋君酔ってゐるね」と言はれしが酔ってゐる身が可愛いかりけり

・ 肩車よろこぶ声は父よりも高きところに麒麟を仰ぐ

一首目はそれでもなお生きねばならぬ現実を、二首目は職場での寸景を、三首目は子供への愛情を、事実の事情説明を省いて描いており、このことがかえって鮮やかに普遍的な真実を伝えることになっており秀作として忘れられない作品である。

・ うつむきてひとはねむれりうつむきてねむるひとときひとはつつまし

・ いつさいは徒労であると長月のすすきの中にほほけしがあり

・ あしたよりわれはわが死を思ひをりめぐり豊けき銀の芒穂

小紋潤の作歌信条は、日常の私事情や、機会詩を避けるということのようである。

このことについてはかつて私の作品に対して厳しい批評をいただいた記憶があり、このたびの『蜜の大地』によって、その批評があらためてよみがえり、考え直し、少し謎がとけたようで感謝している。